

HUAP東京大学運営委員会19期
東京カンファレンス2025 報告書

本報告書について

本報告書はHUAP (Harvard Undergraduates in Asia Program) 東京大学運営委員会19期が企画・運営した、「東京カンファレンス2025」について報告することを目的としたものです。

目次

- 03 1. HUAPとは
- 04 2. HUAP 東京カンファレンス2025 協賛・協力
- 05 3. プログラム詳細報告
- 28 4. HCAP東京カンファレンス2025 総括
- 30 5. HCAP東京カンファレンス2025 会計報告

1.HUAPとは

HUAP（正式名称：Harvard Undergraduates in Asia Program）（2024年度より旧称、HCAP：Harvard College in Asia Programから変更されました）は2003年10月に、ハーバード生とアジアのトップレベルの大学の学生の間で相互に対する関心や理解を深めていくことを目的として、ハーバード大学で創設された学生組織です。スポンサーを得て相互にカンファレンスを開催することで、学生に模索や成長の機会を与えると共に、未来のリーダーたちをつなげ、将来の国家間の関係強化をもたらすプラットフォームとなっています。

東京大学が提携校として選ばれた、すなわちHCAP東京大学運営委員会（現在はHUAP東京大学運営委員会）が発足したのは2006年のことで、翌年の2007年に初めて日本で東京カンファレンスが行われました。この時、HCAPハーバード本部と東京大学をつなげ、HCAP東京大学運営委員会の設立に尽力したのが、当時ハーバード大学物理学科に在籍していた北川拓也さんです。

北川さんは東京大学に在籍していた城口洋平さんと協力し、HCAP東京大学運営委員会1期を発足させました。HCAP1期は当時の1年生のうち、各科類の主席クラスの学生たちで構成されていました。こうして活動を開始したHCAP東京大学運営委員会は一年生中心という特徴を持つことになり、一年完結の活動が営まれ続け、現在の19期まで受け継がれています。HUAP東京大学運営委員会はHUAPの一支部ですが、それ自体独自のコミュニティとして発展し、現在では100人を超えるアラムナイを有する大きな組織となりました。

当初は日本の大学に今のような国際交流系団体は多くなく、団体として若かったこの団体も構成人数の変更や他大学メンバーの受け入れ、同一メンバーの複数年活動など、多くの試行錯誤を重ねてきました。

この団体のあり方は年を経るごとに少しずつ変わっていますが、東大内の志高い一年生を集め、一年生中心という特徴は変えないまま、発足以来19年連続でアプリケーションの選考を通過し、カンファレンス開催を実現しています（新型コロナウイルスの影響を受けた2019年度を除く）。そして平成28年度にはHCAP東京大学運営委員会として、東大総長賞を受賞しています。

2.HUAP 東京カンファレンス2025 協賛・協力（敬称略）

協賛

社会保険労務士法人felicia

Crimson Education Japan 株式会社

A.T. カーニー

Snap Inc.

青山社中株式会社

一般社団法人 東大駒場友の会

後援

外務省

顧問

東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 教授 松田 恭幸 氏

その他ご協力

SEKAI HOTEL株式会社

公益財団法人 孫正義育英財団

有限会社安久工機

日本空港ビルデング株式会社

公益財団法人大田区産業振興協会

株式会社桂川精螺製作所

3.プログラム詳細報告

DAY1

Opening Ceremony

【日時】

3月17日（日）13:30-14:00

【場所】

知るカフェ 東大（駒場）前店

【企画目的】

今後のプログラム全体の流れを共有することで、参加者がそれぞれの企画をどう位置づけ、どう向き合っていくのかを考えるきっかけを作った。どんな企画が用意されていて、なぜそれが必要なのかを知ることは、より深く関わっていくための土台になった。

それだけではなく、約2ヶ月ぶりに再会するハーバードの学生たちと、改めて対話を始めるための空気をつくることも重要な目的のひとつだった。初対面ほどお互い緊張しなかったものの、会っていない期間中のお互いの変化や今の思考に触れ直す機会を設けることで、再び自然な関係を築いていけるようにした。

さらに、Opening Ceremony は東京コンファレンスの幕開けを象徴する場であった。個人としても、チームとしても、この対話の時間にどう向き合うのかを改めて考え、そのスタンスを自分の中で確かめることで、カンファレンスの経験がより意味のあるものになることを期待して企画した。

【企画内容】

本企画では、しおりを使いながら今後の行程を共有するとともに、HUAP Tokyo が今回のカンファレンステーマとして掲げた「日本の二面性」についての説明が行われた。どのような視点からこのテーマを選び、なぜ今「二面性」に注目するのか。カンファレンス中の問いや対話の軸となる部分を、参加者それぞれが自分の言葉で受け取るための入り口になった。

また、事前に回収したコメントをもとに、お互いに向けたコメントの中から印象的なものをいくつか紹介した。それはただの褒め言葉ではなく、相手の内面やふとした魅力に気づいた視点が込められていて、初対面では見えなかった一面を知るきっかけにもなった。改めて相手を知ること、そして知ってもらうこと。それが、一緒に過ごす1週間の空気をあたたかく、密度のあるものになるために役に立った。

その後、「二面性」というテーマに込めたHUAP Tokyoの問題意識や、「日本のもう一つの顔」を伝えたいという想いについてのプレゼンが行われた。表と裏、光と影、理想と現実。どの社会にもあ

る重なりとずれを、日本という切り口からどう読み解くかが説明された。

最後に、集合写真を撮影した。その一枚には、東京コンファレンスの開幕と、今はまだ始まったばかりの出会いと、これから深まっていくはずの対話への期待が含まれた。

【総括】

Opening Ceremonyは、東京コンファレンスの出発点として、情報共有だけでなく、チーム間の関係性の再構築や、共通テーマに対する意識の統一にも大きな役割を果たしたといえる。プログラムの開始時点で、参加者全員が「なぜ今この場にいるのか」「これから何を共に考えていくのか」を改めて確認する貴重な時間となった。

【文責】 HUAP東京大学運営委員会19期 Becky

UTokyo×Harvard Campus Tour & Discussion

【日時】

3月17日（日） 14:00-16:00

【場所】

知るカフェ東京大学(駒場)前店

【企画目的】

東京大学駒場キャンパスを舞台に異なる文化的背景を持つ学生同士が互いに学び合い、対話を通じて視野を広げること、及び東大生とハーバード生の双方が、他国の学生からの視点を受けながら「大学とは何か」「学ぶとはどういうことか」といった根本的な問いに立ち返ることを目的とする。

【企画内容】

14:00に参加者が知るカフェに集合し、1グループにハーバード生1名+東大生複数名という編成で全7グループを編成。名札の配布と簡単な自己紹介を済ませ、和やかな雰囲気の中で開会した。その後、スライドを用いて本企画の開会式を行った。

開会式が終わり、900番講堂や各教室、駒場図書館、生協食堂などの駒場キャンパス内の象徴的な施設を巡るツアーを実施。HUAP19期が英語でガイド役を務め、各施設にまつわる情報や東大生の生活について、ハーバード生に紹介をした。キャンパスツアー中には、学生間で自然と教育制度の違いや学生生活についての話題が飛び交い、日本の学生が日々感じる「大学らしさ」や、ハーバード大学の授業スタイルとの違いについて活発な意見交換が行われた。

知るカフェに戻り、軽食を囲みながら、テーマに沿ってグループごとにディスカッションを実施した。テーマは、「授業形式(講義中心 vs セミナー主体)」「学生と教授の距離感」「課外活動やインターンへの参加度」など多岐に渡った。日本とアメリカの制度・文化の違いに加え、個人として「ど

う生きるか」「どう学ぶか」への意識の違いについても考えるきっかけとなり、多様性と共通性の両方を体感できる貴重な機会となった。

最後に閉会式を行った。全体で感想を共有し合う時間を設けた後、学生間で自然なネットワーキングが生まれ、今後の個人的な交流の種も蒔かれた。

【総括】

本企画は、東大生、ハーバード生の双方にとって有益な活動となった。

まず東大生にとっては、ハーバード生との対話を通して、英語による自己表現力と異文化理解力を養う機会となり、自分の大学生活に対する新たな視座を得た。また、「大学」という制度のあり方を改めて考え、自らの主体性を再確認する契機となったという点で有益であった。

一方、ハーバード生にとっては、日本の大学環境や学生文化を直に知ることによって異文化理解が深まり、能動的に相互的な国際交流を行うことの可能性を実感したという点で価値のある企画であった。

今回の取り組みは、単なる「国際交流イベント」にとどまらず、学生個々人が「自分にとっての大学とは何か」「学びとは何か」に向き合う機会となり、東大生、ハーバード生の双方にとって非常に有益なものとなったと考える。

【文責】HUAP東京大学運営委員会19期 栗秋健吾

DAY2

Crimson × HUAP19期 高校生イベント

【日時】

3月16日（日）18:00-20:30

【場所】

Crimson Education様オフィス

東京都台東区柳橋1-4-5 ザパークレックス浅草橋 3階

【企画目的】

世界トップ大学であるハーバードの学生との交流を通じて、高校生が今後進みたい道を見つめ直し、より良い進路選択ができるようになるため。同時に、ハーバード生と日本の未来を担う優秀な人材が交流し、良い刺激をお互いに与え合える機会とするため。

【企画内容】

参加者は会場に到着するとまず名札を受け取り、プレゼンが見えるように配置された席についた。

開始時刻と共に開会式・団体紹介が始まり、Crimson Education様からイベントの目的についての説明が行われた。その後、ハーバード生による自己紹介が行われ、1人あたり1分で、名前や勉強していることを話した。

そして企画はメイン企画である、海外大学進学のための説明とパネルディスカッションへと移った。具体的には、Crimson Education様より海外進学のプロセスと合格率を上げる戦略の説明が行われた後、パネルディスカッションが行われた。パネルディスカッションでは、大学に入る前の受験準備について、Crimson Educationスタッフの方の質問に答える形でハーバード生2名が話した。ハーバード入学前の話をメインに、志望理由や高校生時代の課外活動等具体的な話もあがった。高校生も熱心に話を聞いており、時折メモを取る姿もみられた。

その後始まったグループワークでは、1グループ 6~7名にわかれた。グループに分かれ課外活動のアドバイスをハーバード生からもらうという内容だった。具体的には、1人3分で高校生課外活動ピッチし、その後ハーバード生によるアドバイスをもらうという流れだった。東大生はファシリテーターとして各グループに一人つき、スムーズな流れを作るように心がけた。高校生は、自分の課外活動をプレゼンでまとめてきたり即興で話したり事前に準備したビラを用いて話したり、と各自の個性がでていた。ハーバード生は一人一人の事情に真摯に向き合い、相手にあったアドバイスをしていた。

すべての行程が終わり、閉会式が行われた。Crimson Education様からCrimson Education様が提供しているサポートの紹介やイベントの結びの言葉をいただいた。閉会式をもって解散となったが、解散後もハーバード生に話を聞きにいく高校生が多く見られた。日本の大学との両立を考えている子たちが東大生に話を聞きにいく姿もみられた。参加者同士で話が盛り上がっている人たちも見られた。

【総括】

本企画は、高校生、東大生、ハーバード生という関係者全員が満足できるような完成度だったと考えられる。

まず高校生は、ハーバード生のリアルな学生生活が知ることができ、どうすればより良い課外活動ができるかを個別でアドバイスがもらえた。また、参加者同士での交流も生まれ同じ目標を目指す仲間と出会えたという点で有益だった。

次に、東大生にとっては、今まであまり聞いてこなかったハーバード生の受験事情について知ることができ、ハーバード生への解像度が上がった。さらに、日米の受験の形式の違いをはっきり認識し教育のあり方について考えるきっかけとなったという点でとても価値のある企画だった。

また、ハーバード生にとっては、自分の受験を見直し今と繋げるきっかけや日本を旅行するだけでは関わることのできない日本の高校生と深く関わる機会となった。

反省点としては、形式に囚われたコミュニケーションの時間が長くなってしまったため、ハーバード生や高校生が自然に打ち解けられるような時間があるとよりよかったかもしれない。

しかし、上記のようにどの立場の人も満足できるような内容であったため、Crimson Education様とのコラボ企画は大成功に終わったと言えるのではないだろうか。

【文責】 HUAP東京大学運営委員会19期 根来

工場見学

【日時】

3月18日（月） 10:00-16:00

【場所】

有限会社安久工機：東京都大田区下丸子2-25-4

株式会社桂川精螺製作所：東京都大田区矢口3-24-1

HiCity：東京都大田区羽田空港1丁目1-4

【企画目的】

我々HUAP Tokyoの独自テーマである「日本の二面性」を、製造業の視点から体感することが本企画の大きな目的である。

安久工機の見学では、日本の産業を長年支えてきた中小企業の現場を訪れることで、海外からのイメージに多い大規模で先進的な工業やエンタメ産業とは異なる、日本の産業のリアルな一面に触れることを目指す。

桂川精螺製作所の見学では、最近打ち上げに成功した月面探査機YAOKIの開発や、ネジ製作といった日本ならではの繊細かつ緻密なものづくりを体感する。また、そのような精緻な作業が、いかにして巨大なプロジェクトを支えているかを実感することが目的である。

HiCityの見学では、製造業という視点からさらに俯瞰的に捉え、オープンイノベーションが活発に行われている現場を見学する。これにより、日本経済の特性や構造について深く考察することを目的とする。

【企画内容】

まず、本企画全体にご協力いただいた田中宙様が代表取締役を務める有限会社安久工機の見学を行った。同社で長年取り組まれている人工心臓の開発支援や、視覚障害者の方のための、書いた文字が浮き上がって触れるようになる触図筆ペンなどの事例を紹介していただいた。

安久工機は試作開発を専門で行われる企業であるため、そのような企業があることは我々にとって新しい発見であったほか、小規模な企業だからこそ顧客一人一人のニーズに細かく、柔軟に対応する様子には深く感銘を受けた。

事例紹介は一部日本語で行われたため、その際は HUAP Tokyoのメンバーが英語で同時通訳を行った。

桂川精螺製作所では、まず20分ほど企業についての説明を社員の方からしていただいた。その際に、月面探査モビリティ『YAOKI』のプロジェクト詳細の紹介や、「塑性加工」という、材料を削らないネジの特殊な加工手法についての説明を受けた。こちらも説明の一部は日本語で行われ、HUAP Tokyoメンバーが通訳を行った。

そのあとは数ミリの大きさのネジを自分の手で作る体験、月面探査モビリティ『YAOKI』のモデルの操縦体験、その他工場内の見学を自由に行った。特にネジ作り体験は、一人一つずつネジを手作業で作ることができた。

そして、最後に『YAOKI』が月面でどのように動くかという問いに対してのシミュレーション実験が行われた。『YAOKI』が入れられた箱を上空から落下させることで一時的に月と同じ重力状態に

し、落下中の様子をスローカメラで撮影することで中の様子を観察した。

昼食を取ったあと羽田空港に移動し、日本空港ビルディング株式会社のご協力のもとHiCityの見学を行った。ここは空港のモビリティ改善や顧客満足度の向上のために多くの企業が共同開発が行われている場であり、多くのオープンイノベーションの事例が体験できた。特にハーバード大生からは最先端技術と日本の伝統文化が融合された物品への強い興味が見受けられた。

HiCity内のPioParkというコワーキングスペースに移動し、世界に挑戦する中小企業の産物を目でみるだけでなく手に触れて実感した。その後、一日の振り返りとして「日本とアメリカのオープンイノベーション」というテーマでディスカッションを行なった。日本のオープンイノベーションの現状や日本経済の概観を説明する10分ほどのプレゼンテーションを行うことでディスカッションを行う上での必要な事前知識を共有し参加者間での共通理解を形成した。そして、四人ほどのグループに分かれ、それぞれ日本のオープンイノベーション、アメリカのオープンイノベーションというテーマのもと、グループ内でディスカッションを行なったのち、スライドとしてまとめて全体に対して自分たちのグループで調べたことや考えたことを発表した。

【総括】

改めて、本企画の、製造業の観点から「日本の二面性」を実感するという目的は多面的に達成されたと考えられる。

安久工機では、我々学生にとってなかなか触れることのできない、小規模ながら高度な技術力を持つ中小企業の方の話を聞いただけでなく実際に開発された器具などを使わせていただいたことでその技術力の高さを身をもって体験できたのはとても新鮮な経験であった。また、ハーバード大生が自身の研究の実装化の可能性について安久工機と連携を模索する場面も見られ、日本の縁の下の力持ち的な産業の価値と可能性が国際的にも強く認識されたことが伺えた。

桂川精螺製作所では日本ならではの精緻さ・緻密さを活かしたものづくりの姿勢に触れ、日常では意識しにくいミクロな技術が、いかにマクロな挑戦を可能にしているかを体験を通じて学ぶことができた。特に、この桂川精螺製作所は映画『下町ロケット』のロケ地としても有名であるが、同社が住宅街の一角に位置しながらも、実際に宇宙開発に貢献しているという事実には強い衝撃を受け、日本の産業が持つ身近さと最先端の両面性を改めて実感することができた。

HiCityでは、空港以外の新たな価値を生み出す場所としての羽田について学び、それらの価値の交錯による日本の次なるイノベーションについて一考する機会が得られた。

ディスカッション企画では、アメリカとの比較を通じて日本的イノベーションの特徴や課題が浮かび上がり、国際的な視点での理解が深まった。加えて、ハーバード大生との初めての本格的な学術的議論を通じて、世界トップレベルの学生が日頃どのような問題意識を持ち、どのような視座で世界を捉えているかを体感することができ、大きな刺激となった。

以上のように、単なる見学にとどまらず、実際に体験し、考え、議論するプロセスを通じることで日本の製造業が内包する二面性について参加者の一人一人が主体的に理解することができた。また、ハーバード大生と東京大学生が互いの視点を交えて議論し、社会課題の解決に向けた道を模索した経験は、HUAPが目指す「未来の国際的リーダーとしての相互交流」の理想形を体現するものであり、本企画は東京カンファレンスにおける極めて有意義なプログラムであったと総括できるだろう。

【文責】HUAP東京大学運営委員会19期 角間小紅

DAY3

孫正義育英財団×HUAP 交流会

【日時】

3月18日（月） 18:00-20:00

【場所】

渋谷キャスト2F

【企画目的】

世界の最前線で学ぶハーバード大学の学生との交流を通じて、孫正義育英財団の奨学生が自身の目標や可能性を見つめ直し、より高い志を抱くきっかけとすること、ハーバード生が日本の未来を担う優秀な人材との出会いにより新たな刺激を得ることを目的とする。

【企画内容】

イベント当日は、ハーバード生、HUAPのメンバーが会場に到着次第、名札やコップへの名前記入を行いながら、会場内では名札・飲み物・軽食・ピザなどの設置やプレゼン用のパソコン準備が進められた。会場のレイアウトは、机を最小限に抑え、自由に移動しやすく交流が自然に生まれるよう工夫された。

開会後は、まず孫正義育英財団についての紹介が行われた。その後、HUAPのメンバーやハーバード大学の学生が一人ずつ、スライドを用いるなどしながら1分間の自己紹介プレゼンを行った。使用言語は英語または日本語で、多様な背景を持つ参加者同士が互いを知る貴重な時間となった。

続いて、孫正義育英財団の奨学生による英語での自己紹介プレゼンが行われた。それぞれが自身の興味関心や将来の目標について簡潔に語り、交流の土台を築いた。

その後の歓談時間では、参加者は名札を付けたまま会場内を自由に移動し、多様な専門性や関心を持つ学生同士が積極的に言葉を交わした。

イベントは終始和やかな雰囲気の中で進行し、参加者同士が互いの価値観に触れ、新たな視座を得る機会となった。最後には全体での挨拶をもって閉会となり、参加者にとって実りあるひとときを締めくくるものとなった。

【総括】

本企画は、孫正義育英財団生、ハーバード大学生、東京大学生が一堂に会し、国籍や専門性、経験の異なる多様なバックグラウンドを持つ学生同士が、互いの視点を交えながら対話を重ねる貴重な機会となった。ディスカッションのテーマは単なる表面的な国際交流にとどまらず、価値観の形成過程や、将来社会にどのようなインパクトをもたらしたいのかといった根源的な問いにまで及び、深い思索と対話が自然発生的に展開された点が印象的であった。

とりわけ、自由かつフラットな雰囲気の中で交わされた対話は、学歴や専門にとらわれず、個人としての思考の成熟度や問題意識の鋭さが浮かび上がる場ともなった。語学的な壁を越えた真摯なやりとりを通じて、単なる「国際的な会話」ではなく、「未来を共に構想する対話」が成立していた

ことは、本企画の最大の成果のひとつであったと言える。

このように、異なる文化・専門・価値観をもつ学生同士が、自由な対話の中で自らの視野を広げることができた本企画は、まさにHUAPが掲げる「国際的な視野と相互理解を基盤とした次世代リーダーの育成」という理念を体現するものであり、東京カンファレンスにおける極めて象徴的なプログラムの一つであったと総括できる。

【文責】 HUAP東京大学運営委員会19期 山田泰

ハーバード生と考える日本（日米）政治の未来

【日時】

3月18日（月） 13:00-15:00

【場所】

東京大学本郷キャンパス

グローバル教育センター（GlobE）多目的室

【企画目的】

ハーバード大学と東京大学の学生が日本、アメリカ、および日米関係の政治課題について議論し、相互の視点を深めることを目的として本企画を立ち上げた。2024年は日米両国にとって国内外の政治的ニュースに大きく注目が集まった一年であったが、実際にその国で暮らしている同世代の学生から見た「その国の今」を共有することで、新たな角度から政治や社会の現状を捉えることができると考えた。このように、今後の課題や可能性について考える契機とすること、さらには学生同士の相互理解と尊重、将来的な国際協力や対話の基盤づくりを狙いとしている。

【企画内容】

企画の目的や概要の説明、スピーカー様の紹介の後、講演が行われた。講演は政策研究大学院大学教授であり、東京大学の卒業生でもある竹中治堅様に依頼し、日米政治の特色や課題についての包括的な見解を示していただいた。その後学生同士による活発な意見交換を行い、最後にグループごとの発表とフィードバックがなされた。

講演では「民主主義への挑戦」をテーマに掲げ、2025年3月14日にトランプ大統領が司法省で行った演説を取り上げつつ、日本における軍国主義の歴史的背景と現代政治との連続性、そしてアメリカにおける民主主義の揺らぎやポピュリズムの台頭といった重要な論点を扱った。

その後のディスカッションでは、4～6人のグループに分かれ、両国の課題や講演の内容で興味を持ったポイント、民主主義の保持や崩壊のセオリーに対する見解などを共有した。最後にグループごとにディスカッションの内容を全体に共有して竹中様よりフィードバックをいただいた。

【総括】

参加者が互いの関心や問題意識を出発点としながら、日米の民主主義、安全保障、ポピュリズムの台頭といった幅広いテーマについて意見を交わすことができた。異なる歴史的背景や社会制度の中で育った学生たちが、共通の課題に対してどのような価値観や思考方法を持っているのかを知ることができた点で、本企画はとても有意義であった。特に、日本の近代政治史や軍国主義の経緯に関する解説は、多くのハーバード大学の学生にとって新鮮かつ衝撃的な内容であり、強い関心を惹きつけていた。また、参加者の学問的背景や政治的スタンス、社会経験が多様であったことから、グループディスカッションは互いにとって未知の観点や主張が飛び交う、知的刺激に満ちた時間となった。

講演において、アメリカの民主主義の脆弱性、将来性に関する直接的な批評は、参加者の多様な政治的立場への配慮から控えられた。しかし、結果としてハーバード大学側の学生から、より率直かつ日本的視点からのアメリカ政治分析を歓迎する声も寄せられたことに驚かされた。これは、国際的な対話における「遠慮」と「正直さ」のバランスに関して、一つの大きな学びでもあった。

本プログラムは東京カンファレンスの中でも唯一、東京大学キャンパス内で実施された講義形式のセッションであり、国境を越えて共有可能な政治的価値や課題認識を育む、非常に貴重な機会となった。参加者が全く新しい視座を提供しあい、相互理解と尊重を深めることができた点で、この企画は当初の目的を達成することができたと言える。こうした対話の機会が今後とも設けられ、将来的な国際協力や建設的な政治的議論の基盤となることを期待し、本企画の総括としたい。

【文責】 HUAP東京大学運営委員会19期 田中れいな

デジタルアートの体験

【日時】

3月18日（月） 16:30-18:00

【場所】

teamLab Planets Tokyo DMM

【企画目的】

東大生とハーバード生が共に最先端のデジタルアートを体験することを通じて、相互理解と文化的交流を深める。特に、五感を使った体験型アートを特徴とするteamLab Planetsにおいて、日本が世界

に誇るメディアアートの革新性に触れ、アートやテクノロジー、そして文化の交差点についての意見交換の場を創出することを目的とする。

【企画内容】

東大生5名、ハーバード生4名で、豊洲にあるteamLab Planetsを訪れた。施設内では9名全員で一緒に行動し、Waterエリアから順番に様々なエリアを体験した。1 エリアあたりそれぞれ約30分ほどをかけてteamLabのデジタルアートを体験した。デジタルアートと身体性が融合した空間を体験し、視覚のみならず身体全体を通じてアートを感じることができる没入型の展示を楽しんだ。また、体験後には、アートとテクノロジーの融合や身体と感性の関係性など、実際の体験の多くがその後の会話の種となった。アートが持つインタラクティブ性や、観る者自身が作品の一部となるという体験が私たちに新たな視点や気づきをもたらした。

【総括】

本企画では、teamLabへの訪問を通じて学生間の交流をさらに深めることができた。特にteamLabによる非言語的な感動を共有したことで、学生間の絆がさらに深まり、その後の交流が加速した。また、teamLabを訪れた際には、アートやテクノロジーに関する議論が自然と生まれ、単なる交流の場にとどまらず、体験と議論を通じて各々が感性を磨くことができた時間であった。

【文責】 HUAP東京大学運営委員会19期 栗秋健吾

日本食文化の体験

【日時】

3月18日（月） 18:00-

【場所】

Airbnb：台東区浅草6-39-1

【企画目的】

様々な国にバックグラウンドを持つ海外の学生と日本食をすることで、日本の食文化を紹介すると共に、一緒に調理・食事をすることで交流を深める。実際に、我々がハーバードカンファレンスでもその国の特有の食文化を体験することでその国の人との交流が活発化したため、食事を介しての交流の場は有効であると考えた。

【企画内容】

手巻き寿司、焼きそば、その他冷凍食品の副菜を用意した。

当日は日本食に親しみのない海外学生にも分かりやすいよう、手巻き寿司の基本的な作り方や具材の説明から始め、各自で自由に具材を選び巻くスタイルで調理を行った。焼きそばについては日本独自のソースの香りに興味を持つ声も多く、実際に調理する様子に多くの学生が集まった。

また、冷凍食品を用いた副菜も紹介し、日本における家庭の食卓やコンビニ文化への話題も広がった。食事中は「この具材は自国の料理にも似ている」といった意見が交わされ、各国の食文化や食習慣についての自然な対話が生まれた。調理から片付けまでを通じ、学生同士が協力しながら交流を深める時間となった。

【総括】

本企画では、海外でも有名な日本食である手巻き寿司や焼きそばを共に調理・実食することで、食を通じた交流を図った。調理を共にするだけでなく、具材の選定や巻き方などを互いに教え合うことで自然な形で文化的対話を生み出すことができたと考える。

また、食後には各国の食文化についての自由な会話が生まれ、互いの生活習慣や価値観の違いに対する理解を深め合った。単なる食事の場にとどまらず、共同作業と対話を通して異文化理解と友好関係を促進する機会として有意義な時間であった。

【文責】 HUAP東京大学運営委員会19期 角間小紅

DAY4

熱海観光

【日時】

3月19日（火） 11:00-16:30

【場所】

コース1 伊豆山神社・走り湯・熱海平和通り商店街

コース2 ACAO FOREST

コース3 七湯コース

【企画目的】

熱海は世界的に著名な観光地ではないものの、日本人にとっては歴史ある温泉地として広く知られており、近年は再び注目を集めつつある地域である。

本企画では、こうした日本人だからこそ紹介できる穴場的な観光地として熱海を選定し、ゆったりとした時間の中で日本の地域文化や温泉文化を体験してもらうことを目的としている。また、単なる観光地としての側面にとどまらず、熱海という土地が持つ地質学的特徴や自然災害のリスクといった課題にも着目し、観光と防災、自然との共生といった視点を持つ契機としたいとも考えた。

なお、参加人数の都合上、当日の観光は三つのグループに分かれて行動した。

【文責】HUAP東京大学運営委員会19期 角間小紅

コース1 伊豆山神社・走り湯・熱海平和通り商店街

【企画内容】

はじめに訪れた伊豆山神社は、源頼朝に縁のある神社として知られており、長い石段を上る過程は日本の神社参拝文化を象徴する体験となった。境内では御籤を引いて結果を読み合ったり、飾られた絵馬を通して日本人の信仰や願いの文化に関して紹介した。

参拝後は、837段の石段を下りながら自然豊かな山道を散策し、日本三大古泉の一つである「走り湯」を見学した。特に、横穴式の珍しい源泉構造とそこから立ち上る湯気に、ハーバード大学の学生たちは強い関心を示していた。

観光後には熱海駅前の平和通り商店街を自由に散策し、地域の特産品や商店の雰囲気を楽しんだ。伝統的な温泉街の景観は、東京とは異なる日本のもう一つの姿を印象づけるものとなっただろう。

【総括】

この企画は国際的な知名度の高さではなく、ありのままの日本の風景や習慣に触れることを重視して構成されたものであり、その目的は十分に達成されたと言える。

神社での体験や散策を通じて、ただの観光という枠を超え、日常に根ざす日本的な精神風土や宗教観を伝えることができたと思われる。また、走り湯では当初の目的通り、地熱活動や自然環境との共存という視点から温泉という資源の背景にもハーバード大生が強く関心を示していた点がすごく印象的であった。さらに、駅前商店街での時間を通じて、都市部とは異なる地元の商いの雰囲気や、地域経済の構造を肌で感じる機会であったと考える。

いわゆる観光地らしさにとらわれないこうした体験を通じて、日本の多層的な側面を再認識するきっかけが随所に見られた企画であったと言える。

【文責】 HUAP東京大学運営委員会19期 角間小紅

コース2 ACAO FOREST

【企画内容】

このコースでは、ハーバード生と東大生混合のグループで、熱海のアカオフォレストを散策した。まず入り口近くでアカオフォレストの特徴や四季折々の花々について学び、写真を撮り合ったり、ガーデンの景観を楽しんだ。園内ではハーバード生から日本の庭園文化や、自然との共生に関する質問が飛び交い、文化交流の会話も弾んだ。

その後、グループで園内の見どころを巡った。まずは「天空の花畑」で、海と花が織りなす絶景を背景に、散策や写真撮影を楽しんだ。その後は、園内のカフェでローズソフトクリームやハーブティーを楽しみ、地元の味覚も堪能した。最後に、園の高台から太平洋を一望し、熱海の豊かな自然と美しい景色を満喫した。

【総括】

本企画は、カンファレンスの中盤に安息を提供することを目的として設けたが、アカオフォレストの多様な施設と豊かな自然環境は、予想を超えて参加者間の文化的交流と知的刺激を促した。曾我浅間神社の訪問を通じて、日本における宗教観やアニミズムに関する議論が自然と展開され、宗教と自然観に対する理解を深める契機となった。日本庭園「天翔」では、精緻な枯山水や世界最大級の盆栽「鳳凰の松」を鑑賞し、日本独自のミニチュア文化や自然との調和を重んじる価値観を学んだ。これにより、単なる観光やフォトジェニックスポット巡りにとどまらず、その背後にある精神性や文化背景を探求する機会となった。

また、園内の多彩なテーマガーデンでは、参加者同士が写真撮影や散策を通じて自然の美しさを共有し、互いの文化的背景を語り合う場が生まれた。隈研吾設計の「COEDA HOUSE」では、絶景を

眺めながら地元の素材を用いたスイーツやドリンクを味わい、食文化を通じた交流も促進した。こうした体験は、熱海という土地の魅力を再発見するとともに、国際的な視点から日本文化を再考する貴重な時間となった。全体として、心身を癒しながらも知的探究心を刺激し、参加者にとって非常に有意義なひとときとなった。

【文責】HUAP東京大学運営委員会19期 山田泰

コース3 七湯コース

【企画内容】

このコースでは、ハーバード生と東大生混合のグループで、熱海の街中の源泉スポットである七湯を巡った。まず熱海駅近くの商店街で食べ歩きや観光を楽しんだ。街を散策しながらハーバード生から日本の温泉文化や宗教観についての質問も飛び交い、会話も弾んだ。それから、有名な七湯のうち下見に行き選定した二つを巡った。一つ目は、小沢の湯で、そこで温泉卵作りを楽しんだ。二つ目は、大湯間歇泉で、熱海の温泉地としての歴史を学びながら迫力のある源泉を観察できた。その後も、近くの商店街やビーチ近くを散策し、熱海の美しい景色を満喫した。

【総括】

熱海の大きな魅力であるそのどこか懐かしさを覚える街を満喫できたという点で、このコースはその目的を達成したと言える。ハーバード生は、温泉街を歩きながら普段見慣れない食べ物を買ったり、大湯間歇泉の近くにあった神社を訪れたり、真新しい景色に興味津々だった。私たちも彼らに日本文化について説明したり、アメリカの文化について質問したりすることで、日本への見方が相対化され、新しい視点を得ることができた。加えて、源泉地巡りを通して熱海の地質学的特徴に実地で触れることができ、温泉地に内在する地震などの災害リスクに目を向けるきっかけにもなった。

熱海は、東京や大阪などの観光地の魅力とは異なった、日本の昔ながらの温泉街の魅力を伝えるためには最適なロケーションであったと断言できる。来日旅行でなかなか目的地として選定されない熱海を東京カンファレンスの拠点として選んだことで、日本らしいゆったりとした時間の流れや、こじんまりとした地元のお店の雰囲気やハーバード生に知ってもらうことができた。総じて、このコース3では気づきの多い充実した時間を過ごすことができ、大成功に終わった。

【文責】HUAP東京大学運営委員会19期 多田夏希

DAY5

セカイホテル（大阪・布施）

【日時】

3月20日－23日

【場所】

大阪府東大阪市足代1丁目19

【企画目的】

本企画は、ハーバード生に日本の地域活性化の取り組みについて知ってもらうこと、そして日本の観光産業の光と影について学ぶことを目的として据えた。

【企画内容】

大阪・布施の商店街を「まちごとホテル」に改装したセカイホテルを訪れ、私たちが用意したキーワードに沿って、写真コンテストを行った。学術企画の中では唯一のフィールドワーク型の企画であり、懐かしさを感じさせる街並みに没入しながら日本の地方創生の取り組みについて多くの視点を得ることができた。

はじめに、事前説明会を行った。セカイホテルの施設を利用させていただき、パワーポイントを用いてセカイホテルの取り組み、日本の観光産業の実態、そして写真コンテストの企画について簡潔に説明した。働き手の減少、レトロの復興、地域の絆、ローカルビジネスのキーワードを設定した。

次に、現地調査・写真撮影に臨んだ。ハーバード生と東大生混合の4つのグループに分かれ、布施の商店街をフィールドワーク形式で歩きながら、与えられたキーワードに沿って写真を撮影した。昔ながらの洋服店で帽子を買ったり、お肉屋さんでコロッケを買ったり、和菓子屋さんで名物の栗まんじゅうを買ったりなど、各々の方法で布施の商店街を満喫していた。また、世界ホテルの方から提供していただいたフィルムカメラで、何気ない瞬間を写真に収めた。

実地研修終了後、各グループが3枚の写真を選び、簡潔な説明とともに全体に共有した。ストーリー性を持たせた写真を撮影した班などもあり、個性にあふれたかつキーワードをよく反映した素晴らしい写真ばかりだった。

続いて、共有された写真や、街を歩きながら得た気づきをもとに、

- 地方創生についてのイメージがこのフィールドワークを通じてどのように変化したか
- 他のグループの写真をみて、どのような視点を新しく得たか

- セカイホテルの取り組みは、他の地域や国に応用することができそうか
- 観光業界はどのように地域創生に関わっていけばよいか

などの提示されたトピックに沿って、グループごとにフィールドワークを総括した。全てのグループで話が絶えないほど活発なディスカッションが続き、このフィールドワークを通じて得られた学びの深さが窺えた。

最後に、全体で最もキーワードを的確に表現した写真を選出する投票と表彰が行われ、この企画は幕を閉じた。

この学術企画に限らず、3日間のセカイホテル滞在の中で、「シャッター街」を「ホテル」として再利用することで新たな価値を生み出しているセカイホテルの取り組みを私たちは存分に感じ取り、日本の観光業が抱える光と影の両側面について深く考えることができた。

【総括】

昨年度に引き続き、東京カンファレンスでセカイホテルを訪れたが、ハーバード生だけでなく東大生にとっても、日本の地方創生の実態について実践的に学ぶ絶好の機会となった。大阪・布施の街を舞台に、シャッター街を再活用したホテル事業の実例に十分に触れつつ、地域資源の魅力の再発見について一人ひとりが主体的に考えることができた。

初めて訪れたとは思えないほどセカイホテルの方々の温かい歓迎を受け、とても充実した時間を過ごした。弊団体のメンバーからは「布施の経済のために利益を上げるためというよりも、お客さんに布施という場所を知ってもらい良い思い出を作ってもらうことを大事にしている印象を受けた」という声も多く上がった。

本企画を通して、私たちは観光を単なる消費行動としてではなく、地域との関わりや文化的継承の手段として再認識し、私たちも観光客として地域に関与することの意義を体感することができた。また、グループに分かれてフィールドワークを行ったことでハーバード生との交流も深まった。以上より、セカイホテルでの滞在は目的の成果をあげることができたといえるだろう。

【文責】HUAP東京大学運営委員会19期 多田夏希

DAY6

京都観光

【日時】

3月21日（火） 11:00-16:30

【場所】

コース1

着物レンタル奈々屋清水本店・八坂神社・清水寺・二寧坂

コース2

着物レンタル岡本嵐山店・嵐山モンキーパーク・渡月橋・竹林

【企画目的】

海外の学生にとって最もよく知られた日本の観光地の一つである京都を訪問し、ハーバード大学の学生に日本文化や歴史を楽しんでもらうことを目的とする。また、観光名所を巡る中で、混雑の状況や一般店舗・住宅街の様子などから、観光が地域に与える影響を実感し、華やかな観光産業の陰で課題となっているオーバーツーリズムについても考察する契機とする。

なお、参加人数の都合上、当日の京都観光は二つのグループに分かれて行動した。

【文責】HUAP東京大学運営委員会19期 角間小紅

京都観光 コース1

【企画内容】

布施から移動し、京都・東山エリアの代表的な観光地である八坂神社へ向かった。徒歩で向かう途中、抹茶専門店で立ち寄り軽食を楽しんだ。京都らしい風情が漂う坂道を進みながら、八坂神社の前で写真撮影も行った。

その後、着物レンタル「ななや」にて、11名それぞれが着物を選び、着付け・ヘアセットを体験した。慣れない草履での移動に備え、事前に注意事項を共有し、必要に応じて靴での参加も認めるなど、柔軟に対応した。

その後は祇園周辺での食べ歩きと、抹茶館での休憩を自由に楽しんだ。京菓子や八つ橋などの名物を味わいながら、東山のにぎやかな街並みを体感する時間となった。

休憩後は清水寺へ移動し、清水の舞台や音羽の滝といった見どころを巡った。途中の産寧坂や二年坂ではお土産を手取る参加者の姿も見られ、文化体験とともに観光ならではの楽しみも味わうことができた。

最後に、「ななや」へと戻り着物を返却した。全行程を通じて、京都の伝統文化と風景を全身で

味わいつつオーバーツーリズムも体感できた充実した一日となった。

【総括】

京都・東山エリアの文化と歴史、街並みの魅力を着物姿で歩くことで、より深く体感することができた本企画は、日本の伝統と観光の融合を実感できる貴重な機会となった。

特に清水寺の荘厳な建築といった文化的要素を通して、日本の宗教的・精神的な側面を学ぶことができた。また、町並みを歩きながらの食べ歩きや抹茶スイーツの体験では、現代の観光スタイルがいかに日本文化を「楽しむ形」で再構成しているかという点も感じられた。

一方で、急な坂道や草履での移動といった身体的な負担もあり、観光の利便性やアクセスの課題についても実感した。特にハーバード大学の学生たちからは観光と身体的制約や文化体験の再構築といった視点からのコメントも多く寄せられ、観光をただ楽しむだけでなく、考察する契機ともなった。さらに、海外からの観光客が多い京都の様子を実際に目にすることで、観光業と地元の人々の生活の両立の難しさも実感した。

本企画は、日本の観光地が持つ伝統文化の保存・発信の場としての意義と、観光客誘致による商業化・負担といった課題の両面を、楽しみながら考える時間となった点において、大変意義深いものであったといえる。

【文責】HUAP東京大学運営委員会19期 根來莉彩

京都観光 コース2

【企画内容】

布施から電車を乗り継ぎ、京都の嵐山へと向かった。電車をおりて、初めに渡月橋が私達を迎えた。渡月橋と山々が連なる京都の代表的な風景を眺めつつ、有名な猿山へと向かった。20分程度かけて山を上り、上から嵐山を一望しつつ、自由に駆け回る猿を観察した。

その後、レンタル着物岡本嵐山店へ向かい各々が着物を選び、着付け体験をした。着物に身を包んだ状態で竹林の小径へ向かい、日本ならではの竹林を背景に写真撮影を行った。向かう途中で野宮神社も訪れつつ、竹林を歩いた。

竹林の後は天龍寺を訪れ、日本ならではの建築や庭園を観察した。嵐山のメイン通りに戻ってきた後は自由にお団子や抹茶ラテなど自由に散策しつつ食べ歩きを楽しんだ。京都ならではの土産を見つつ、皆が満足できる時間を過ごすことができた。

【総括】

日本を代表する観光地の一つである京都・嵐山を訪れることで、日本の伝統文化や風景を肌で感じ、全身で味わうことができた企画であった。

当日は観光の閑散期にあたっていたため、普段に比べて観光客の数は少ないように感じられた。そのような状態でも、ハーバード大学の学生たちから自然と「観光客の異常な多さ」について意見が求められた。日常的には見過ごしがちな視点ではあるが、彼らとのやりとりを通して観光地の「文化の継承や発信の場」としての側面と、「過剰な商業化や混雑による弊害」といった相反する側面の両方を、より深く考察することができた。本企画がこのような思考の契機となった点は、非常に意義深いものだったといえる。

一方で、観光地ならではの食べ歩きなどを通して、素直に本企画自体を楽しむこともできた。こうした娯楽と、文化や社会の在り方に対する批判的思考という両方の側面を兼ね備えた本企画は、当初の目的であった「観光地の持つ両義的な側面を見つめ直す」という課題に対して、十分な契機を提供したといえるだろう。

【文責】HUAP東京大学運営委員会19期 磯野真那花

DAY7

Closing Ceremony

【日時】

3月23日（日）10:00-12:15

【場所】

大阪府東大阪市長堂1丁目8-3 7 ヴェルノール布施 3階

【企画目的】

東京カンファレンス全体を振り返り、得た学びや気づきを言語化し、参加者全員で共有する。共同成果物や他の参加者へのメッセージカードの作成を通して、TC中の七日間で得た参加者同士のつながりを再確認する。

【企画内容】

まず、「自分の思う“日本”の表現」というテーマを設定し、参加者を6名×3グループに分け、それぞれの体験・学びをもとに、模造紙に言葉やイラストで“日本”を表現した。

グループ内で対話を通じて認識の共有や発見があり、最終的に多様な視点が反映されたアウトプットとなった。それぞれの表現する日本像はどれも異なり、多種多様な視点を知る機会となった。また、参加者全員で取り組む最後の機会として、一体感を持ちながら制作を進めることができた。

次に、「5年後の自分に覚えていてほしい“気づき”」をテーマに設定し、東京カンファレンス期間中の学び・感情を内省し、ポストカードに記入した。裏面にはその気づきの背景となったエピソードを記した。終了後、おみくじ方式でランダムに交換し、他の参加者が書いた気づきを共有し合った。メッセージカードへの記入を通して自分自身を内省し、自分の成長や得た学びについて考える時間になっただけでなく、他者の気づきを受け取ることで、間接的に他の参加者からの学びを受け取ることもできた。

最後に、団体副代表からCertificate が一人ひとりに手渡され、その後全体で記念撮影を行った。最後の挨拶では、これまでの活動をともにしてきた参加者への感謝を述べ、温かい雰囲気の中で閉会した。

【総括】

改めて、Closing ceremonyは、東京カンファレンス（以下TC）を通じて得られた経験や学びを深く内省し、言語化・共有するという目的において成果を上げたと考えられる。

模造紙制作のパートでは、「自分の思う“日本”の表現」という大きなテーマのもと、各グループがTCでの体験をもとに思考を巡らせた。歴史、文化、制度、日常風景など、切り口も視点も多様でありながら、それぞれのグループが紙の上に自分たちなりの「日本像」を創り上げていくプロセス

は、日本の多面性を浮かび上がらせる貴重な機会となった。英語で議論を通して、表現の難しさや伝え方への工夫も生まれ、異文化間での相互理解の意義をあらためて実感する場ともなった。

また、「5年後の自分に覚えていてほしい気づき」をテーマとした一言プレゼントの制作・交換では、TCを通して得た個々の内面的な学びに向き合う時間が生まれた。誰かに渡るとわかっているからこそ、自分自身にとっても他者にとっても意味のある言葉を選び抜こうとする姿勢が印象的であった。普段の生活では意識しにくい「未来の自分」という観点からの振り返りは、TCの経験をより長期的な成長につなげる役割を果たしたといえる。

クロージングセレモニー全体を通じて、TCが単なる観光や議論の連続ではなく、参加者一人ひとりの思考と感情に深く作用した“体験”であったことが可視化され、共有される場となった。また、東京大学生・ハーバード大学生が互いの価値観を持ち寄りながら、相互理解と共創のプロセスを最後まで丁寧に行えたことは、HUAPの掲げる「未来の国際的リーダーとしての育成と交流」という理念の体現ともいえる。

このセレモニーは、TCの「終わり」であると同時に、参加者の内面に新たな問いと視座を芽生えさせる「始まり」であり、本企画はTC全体を意味づけるうえで重要な企画として、記憶にも記録にも残るものとなったと総括できるだろう。

【文責】HUAP東京大学運営委員会19期 佐藤弘徳

4.HUAP東京カンファレンス2025 総括

振り返ってみれば、この1年間を通して私たちが経験したのは、単なる活動の集積ではなく、「他者とともに在ること」とはどういうことなのかを問い続ける時間だったように思います。対話や摩擦、そして模索の連続の中で、私たちは数々の課題や葛藤に直面しました。そこにあったのは企画の実行や運営の巧拙といった実務的な問題ではなく、より本質的に団体内外を問わず「他者とどう向き合うか」といった根源的な問いでした。その意味で、本活動は単なるイベントではなく、自己と他者、ローカルとグローバル、感情と行動とをめぐり内省の場であったと言えると思います。

活動の中で私たちは、相手と向き合おうとすること自体が決して当然でも容易でもないという事実を強烈に痛感しました。相手の沈黙や言葉に耳を傾け、言葉にならない思いに想像力を働かせること。それは、私たち19期がこのカンファレンスとカンファレンスへの準備を通じて少しずつ身につけていった態度であり、その積み重ねこそが関係というものの本質を教えてくれたように思います。「わかり合えた」と確信できた瞬間は、実際にはそう多くなかったかもしれません。しかし、真剣に話し合い、笑い合い、ときに対立や喧嘩を経て、すれ違いながらも共に過ごした時間の末に最後に一緒に何かを成し遂げたという事実は、単なる理解を超えて、私たちの間に言葉では表現しきれない確かな何かを残してくれました。

東京カンファレンスを終えた今、「成功だったか」と問われたとしても、私は即答できません。確かに反省すべき点は多く、理想通りにいかなかった場面も多々ありました。しかし、そうした不完全さのなかでさえ、誠実に誰かと関わろうとした時間があったということを、私は誇りに思っています。効率や成果だけでは測れない価値があるとすれば、それはまさにそうした時間のなかにこそ宿るものだと思います。人と関わることは時に煩わしく、時に自分自身の未熟さを突きつけられるような感覚を伴います。それでもなお、私たちが人と関わろうとすべきなのは、きっとその過程の中に自分でも知らなかった自分の可能性や輪郭を見つけることができるからです。他者は私たちにとって常に未知であり続けますが、その未知と向き合うことを放棄しない限り、私たちは変わり続けることができるのだと、今回の経験を通して実感しました。

最後にはなりますが、このような忘れがたい時間を過ごすことができたのは、様々な形でご支援、ご協力いただいた皆様のおかげです。この場を借りて、改めて厚く御礼申し上げます。そして、この1年で得た知見や感情の蓄積を一過性の思い出として風化させることなく、この経験をもとにこれからも努力を重ねていくことを誓い、総括とさせていただきます。

HUAP東京大学運営委員会19期副代表
水澤伶介

一年間の活動を終え、「どんな一年だった？」と問われることが何度もありました。一言で言い表すことは到底できませんが、あえて選ぶとすれば「怒濤」という言葉が最もしっくりきます。

企業様との渉外、ハーバード大学での経験、カンファレンスの準備・運営、新歓や選考活動などいずれも初めての挑戦であり、常に手探りの連続でした。同時に、組織という枠組みの中で「他者とどう関わるか」「自分は何を果たせるのか」といった問いにも向き合う一年となりました。

やるべきこと、やりたいこと、そしてやり方すら見えない中で前に進もうとした試行錯誤と葛藤は、これからの人生において何ものにも代えがたい糧となっています。

活動初期、どのような団体なのかも把握しきれないまま集められた11人でのスタートでしたが、それぞれが模索しながら進んできました。幾度となく失敗を経験し、東京大学やHUAPへの合格で芽生えたわずかな自信が削られていく感覚を味わうこともありました。

ハーバードでのカンファレンスを終え、それぞれが複雑な感情を抱えながら迎えた東京での運営は、「大変だったけれど成功した」といった言葉だけでは語り切れない経験でした。限界にぶつかり、傷つき、時には他者を傷つけてしまったこともあったと思います。それでも、カンファレンス全日程を終えた瞬間に湧き上がった達成感や安堵感、充足感は、言葉では言い表せないほど強烈で、今でも鮮やかに記憶に残っています。

この一年間、HUAPという団体の、社会へもたらしうる影響について何度も考えました。その中でたどり着いたひとつの答えは、「この一年自体に社会的意義があるわけではない」ということです。

HUAPは、未熟な学生がその自らの未熟さを痛感し、他者の未熟さにも寛容になることで共に成長し合い、そしてその成長過程そのものに価値を見出させる場だと感じました。

机に向かうだけの勉強では決して得られないような経験を通して、自分なりの人生に対する視座を形成し、将来それを社会のために還元できる「何者か」になる。この団体は、その入り口に立たせてくれた場所だったと思います。

情熱、葛藤、挫折、信頼、そして充足感。これらの感情を、人生の入口とも言える大学一年という時期に体験できたことは、何よりの財産だと感じます。そしてこれは、この活動を支えてくださった皆様の存在があってこそ実現できた経験であると、心より感謝申し上げます。

この団体がもたらすものは、参加する各人によってまったく異なると思います。私たちの後輩にあたる20期のメンバーにも、さまざまな経験を通じて、それぞれの学びを得てほしいと願っております。僭越ながらのお願いではございますが、今後も変わらぬご支援を賜れますと幸いです。

拙い文章ではございますが、皆様に支えていただいた一年間を改めて振り返り、今後の人生の糧とさせていただきます。

HUAP東京大学運営委員会 19期副代表
角間小紅

5.2024年度HUAP東京大学運営委員会 収支報告書

収入の部

項目	詳細	金額
繰越金		293,780
寄付金	青山社中株式会社	100,000
	一般社団法人 東大駒場友の会	122,400
	Snap Inc.	11,000
	A.T. カーニー	100,000
	FELIX	1,000,000
	Waterdragon Foundation	2,000,000
	クラウドファンディング	31,417
利息		485
	計	3,659,082

支出の部

項目	詳細	金額
Tokyo Conference	在来線移動20名分	144,443
	新幹線移動20名分	465,830
	Uber移動20名分	22,740
	国立オリンピック記念青少年総合センター宿泊 20名分	94,920
	Airbnb宿泊20名分	363,918
	ホテルニューアカオ宿泊20名分	290,200
	印刷・消耗品代	9,501
	荷物預け入れ	31,000
	teamLab 見学科	55,200
	Airbnb企画費	20,256
	政治講義依頼料	80,000
	ACAO FOREST 見学科	7,500
	京都着物レンタル代	97,824
	熱海下見企画費	23,760
	施設借用費	33,541

	食費	170,050
Harvard Conference	補助費	1,375,000
新入生採用活動費	Airbnb宿泊費、消耗品代等	31,133
全体企画費	クラウドファンディングPR費、消耗品代等	14,119
手数料	銀行振込手数料	4,510
計		3,335,445

収入金額合計	3,659,082
支出金額合計	3,335,445
差引収支	323,637

※差引収支は、次年度活動への繰越金に充当させていただきます。